

令和 3 年度 第 1 回教育課程編成委員会（柔道整復学科）議事録

【日時】 令和 3 年 9 月 14 日（火） 16:00～17:00

【場所】 日本医学柔整鍼灸専門学校 ZOOM 開催

【出席】 委員 佐藤 和伸（佐藤代田接骨院 院長）

加瀬 剛（キネシオ接骨院 院長）

小泉 利幸（三進興産株式会社）

道狭 ひろ子（ひろこ整骨治療室 院長）

学校 奥田 久幸（校長）

岸本 光正（副校長）

木下 美聡（フロンティア推進部長）

伊藤 恵里（副学科長）

森下 友雄（副学科長）

中村 幹佑（教務委員長・鍼灸学科教員）

鴨田 佳典（柔道整復学科教員）

事務局 吉田 智哉（事務部長代行）

小浜 悠樹 兼子 啓太郎 川上 英史 圓乗 佑太 伊藤 真紀（議事録）

以上 17 名

【欠席】 委員 伊藤 述史（公益社団法人東京都柔道整復師会会長）

【議題】

（1）前回報告事項の進捗

（2）2022 年度新カリキュラムについて

（3）国が定めるカリキュラム教育目標と臨床現場との関連について

(1) 前回報告事項の進捗

「超音波観察」・「高齢者対応」をどのように学ぶか。

⇒超音波観察については、柔道整復学や柔道整復実技の授業内で行っている。後期に向けて、ゼミ等の授業時間外などでも学ぶ機会の拡充をしていきたいと考えている。

高齢者ケアについては「柔道整復実技 10」として教科書に則って授業を行っている。

全 18 回のうち前段が高齢者、8 回目以降が介護や高齢者の自立支援等の内容になっていて、まさにタイムリーに授業が組まれている。ゼミとしては高齢者ケアゼミ内で機能訓練指導員を目指す学生に対して、高齢者の機能訓練を実施して、学生に FB をしている。それ以外であると臨床実習内で取り入れる予定になっていたがコロナで実施できていないが再開後実施していきたい。

(2) 2022 年度新カリキュラムについて

2022 年 4 月に改訂を予定している新カリキュラムについて、下記 3 項目の報告を行った。

①カリキュラム改定の背景

②どのような要素からカリキュラムの改訂を行ったか

③カリキュラム改定のポイントや特徴

(委員からの質問・意見)

オンライン授業の状況はどのようになっているか。

また、オンライン授業において、理解度はどのようにして図るのか？

(学校からの回答)

現在は、新型コロナウイルスの感染が急拡大している状況を鑑み、座学授業にてオンライン授業を活用する割合を大きく増やしている。今後も感染状況などを踏まえ、授業形態を判断していくが、新カリキュラムにおいても国が定める基準をクリアしながら、

遠隔授業を活用できるよう準備を進めている。現在の具体的な取り組みとしては、Google のアプリケーションを利用して、授業内で確認テストを実施したり、ミニレポートを課題として出したりして双方向性を保って実施しているが、中にはオンライン学習をうまく活用できない学生がいるので様子を見ながらフォローしている。自宅でのオンライン授業だとモチベーションが低下してしまう学生には、感染対策を講じて学校で授業を受けることができるようにもしている。

(委員からの意見)

新カリキュラムにおける科目関係図はゴール (ディプロマポリシー) までの全体像が見えるとともに、自分が現在どの部分を学んでいて、3 年間の中で現在どの地点にいるのか大変わかりやすい。ぜひ学生に展開してほしい。

(学校からの回答)

学生へ展開できるよう準備をすすめる。

(委員からの質問・意見)

- ・「ケアコミュニケーション」という科目はどのような科目か？
- ・臨床実習で学生を受け入れている中で、知識は持っているが、「これはどういうことなのか」尋ねると答えられない学生が多い。授業で学習した内容をどのように説明するのか、どうしたらわかりやすく伝わるのか、学生がアウトプットの練習ができるプログラムも講義内に入れ込んでいただきたい。

(学校からの回答)

「ケアコミュニケーション」は 1 年次の前期に配置している。この科目設定の大きな目的は 3 年後医療人として社会にでるために必要な基本的な人としてのコミュニケーションの確認、気づきを学び、障害をもった方への対応、ターミナルケアの方への対応も含めコミュニケーションの基礎を学んでいく科目である。学生がアウトプットの練習ができるプログラムを取り入れる、というご意見は非常に参考となったので検討して

いきたい。

(委員からの質問・意見)

通学型、オンライン型と選択肢が増えるのは大変よいと思っている。また、社会人の学びなおしにオンライン授業は大変有効であると思うので前向きに検討いただきたい。

(学校からの回答)

コロナ収束後であっても正規の授業でオンラインを活用できるのか担当省庁に確認しており、引き続き前向きに検討していきたい。

3. 国が定めるカリキュラム教育目標と臨床現場との関連について

柔道整復師を育成する教育機関としてカリキュラム編成していく中で、柔道整復師の業務範囲などを考えたときに、以下【資料1・2】に記載されているような急性外傷ではない部分をどのように解釈して、正規のカリキュラム内で明記し授業内容に反映すべきか、委員に意見を求めた。

【資料1】平成29年3月31日改正「柔道整復師養成施設指導ガイドライン」より抜粋
—柔道整復技術の教育内容—

種々の外傷に必要な予防（高齢者、競技者等）と治療の技術を修得する。また、柔道整復に関しての社会的要請の多様化に対応できる臨床的観察能力、分析力を養う。

【資料2】森下先生のスライドから転載

(委員からの意見)

柔整師の保険適用範囲は急性外傷のみであるが、とは言え予防を含めたそれ以外の知識を知らなくてもよいというわけではない。腰痛一つをとっても、急性か慢性かの判断や再発は急性と考えるかなど、様々な原因で起こる腰痛の全てに対応できるスキルを身につけておくべきである。また、臨床の場で柔整師として直接の治療は出来ない疾患

であっても、患者への説明が必要であり、そのスキルを学んでおくべきだと思う。

柔整師として直接の治療は出来ない疾患であっても広げて治療技術を教えていかないと、現場に出たときに患者様の治療の方向性がわからなくなってしまうので、学んでおかけなければならないことだと思う。

(学校からの総括)

今回のカリキュラム編成に当たっては、今までにない様々な要素から振り返りをした。今回は学校のあるべき姿、我々が目指す人材像という観点、現在本校がもっている課題等を合わせて反映させたものだと思う。カリキュラム編成はあくまでも「計画書」であり「設計書」である。これからシラバスに落とし込み、さらに授業で運営していく。これからは一番大変なところであるので先生方には引き続きご指導ご鞭撻をお願いいたします。

以上

令和 3 年度 第 2 回教育課程編成委員会（柔道整復学科）議事録

【日時】令和 4 年 2 月 22 日（火） 14:00～15:00

【場所】日本医学柔整鍼灸専門学校 ZOOM 開催

【出席】委員 佐藤 和伸（佐藤代田接骨院 院長）

小泉 利幸（三進興産株式会社）

道狭 ひろ子（ひろこ整骨治療室 院長）

学校 奥田 久幸（校長）

岸本 光正（副校長）

木下 美聡（フロンティア推進部長）

森下 友雄（副学科長）

伊藤 恵里（副学科長）

中村 幹佑（教務委員長・鍼灸学科教員）

鴨田 佳典（柔道整復学科教員）

事務局 吉田 智哉（事務部長代行）

小浜 悠樹 兼子 啓太郎 伊藤 真紀

川上 英史 圓乗 佑太 緒方 洋太郎（議事録）

以上 17 名

【欠席】委員 伊藤 述史（公益社団法人東京都柔道整復師会会長）

加瀬 剛（キネシオ接骨院 院長）

【議題】

（1）振り返り

（2）学び直し層（40 代以上）の学生に身に付けておいてほしいこと

(3) コロナ禍における接骨院業務のイノベーション

(1) 振り返り

2021年2月16日にいただいた各ご意見に対して、以下報告された。

- ・超音波画像装置を取り扱う場合は学習レベルを設定することを推奨
報告) 年次毎、各レベルに応じて達成可能な目標を設定していく。

1年次 基礎・肩周辺（主に腱板）

2年次 肩周辺・下腿の筋・足関節外側靭帯

3年次 画像判断能力（臨床総合柔道整復学）

上記報告に対して、委員の先生より下記のご意見をいただく。

- ・肩関節は難しくて学生が飽きてしまう。楽しくやるために、より簡単に学べる足首
周りやふくらはぎ等が良いかと思う。

- ・物理療法をカリキュラムに組み込むのはどうか。

回答) 1年次の附属接骨院での臨床実習から目標を設定、積極的に触れる機会を設けていく。

- ・高齢者対応について「体のしくみ」が非常に大切。深くまできちんと理解した機能
訓練指導員となるため、筋肉の運動のしくみと、該当箇所を鍛えることによってな
ぜ転倒しないのか、を学ぶ必要がある。

回答) 解剖学等の「体のしくみ」を基礎に、運動学や新カリキュラム内「外傷予防」

等で、指導員として「説明ができる機能訓練指導」に取り組んでいく。

(2) 学び直し層（40 代以上）の学生に身に付けておいてほしいこと

学校より、以下の点が報告された。

- ・40 歳以上の入学者が増えている。
- ・個人の考え方に固執せず成長を促すためには、「素直さ」が大切ではないか。

「素直さ」：環境や変化／他人や意見／現実の自分 を受け入れる力

- ・「素直さ」を取り戻すため、「ケアコミュニケーション」という科目を開始予定

上記報告に対して、委員の先生方より、以下の点についてご意見をいただき、それぞれ学校から下記のように回答をした。

- ・学生には、医療人として、患者に寄り添うため「自分だったらどうしたらよいか」を改めて考えてほしい。

回答) 新カリキュラム「ケアコミュニケーション」の特に後半部で取り組む予定。座学、実技双方で、いただいたご意見をもとに教員と連携をとっていく。

- ・何を目的で入学しているかを改めて問い直す必要あり。学生の本当の目的はどうか？

回答) 目的は様々。外傷師になりたい、マッサージ師になりたい、開業したい、等。

- ・介護の分野で最も問題になるのはレベルの低さ。現状は、自己中心的、他のところでは仕事ができない人が集まっている。

回答) 学内でも温度差があるのも事実で、そちらを埋めていくために取り組んできたい。

- ・先入観にとらわれず、患者の悩みに紳士に向き合い、寄り添うことが非常に重要。経験を積んできている方に対して、難しい部分もあるかもしれない。

回答) 自分ができていることをリセットして、改めて医療人として学びなおしできる
よう教育していきたい。

(3) コロナ禍における接骨院業務のイノベーション

学校より、コロナ禍で、現場で変化したことは何かを伺い、カリキュラムに盛り込んで
いきたいとしてご意見を伺った。委員より、下記のご意見をいただいた。

- ・コロナ禍の期間「全体」と、その中でも「ピークの時期」とで大きく異なるので、時期ごとに見ていく必要がある。コロナのピークの時期はほとんど患者さんが来ない。落ち着いてくると一気に忙しくなる（急に運動して外傷が増える）。
- ・消毒をすごく気にしていて来院が少ない。久しぶりに来ると体は固いし、気持ちも落ち込んでいる。そのため、一人一人を治療することに、以前より時間がかかっている。家で自分でもできることを教える。
- ・コロナ禍でも、対人関係、コミュニケーションがあって初めて授業が成り立ってくる。
- ・マッサージなどチェーン展開しているところも、限界を感じ、外傷にも興味を持ってきている。
- ・通院できない方に向けても往診できるか、という観点を授業に入れていくとよい。

- ・ 自宅で過ごす時間の増加に伴い、フットケアがとても大事だと感じる。

以上

令和 3 年度 第 1 回教育課程編成委員会（鍼灸学科）議事録

【日時】令和 3 年 9 月 16 日（木） 14:00～15:00

【場所】日本医学柔整鍼灸専門学校 ZOOM 開催

【出席】委員 前田 真也（カリスタ株式会社 代表取締役）

藤原 良次（本校校友会 会長、株式会社アールエフ 代表取締役社長）

鈴木 幸次郎（株式会社天心堂鍼灸院 院長）

松田 博公（元東洋鍼灸専門学校 副校長）

寺裏 誠司（株式会社学び 代表取締役）

小林 潤一郎（公益社団法人東京都鍼灸師会 副会長）

武内 潔（公益社団法人東京都鍼灸師会 副会長）

学校 岸本 光正（副校長）

青木 春美（学科長）

中村 幹佑（教務委員長・鍼灸学科教員）

天野 陽介（学生委員会・鍼灸学科教員）

西野 祐介（鍼灸学科教員）

事務局 吉田 智哉（事務部長代行）

小浜 悠樹 兼子 啓太郎 川上英史 圓乗佑太 伊藤真紀（議事録）

以上 18 名

【議題】

(1) カリキュラム改訂について

2022 年 4 月に改訂を予定している新カリキュラムについて、下記 2 項目の報告を行った。

①カリキュラム改定の背景と教学マネジメントについて

②前回委員会でいただいた意見と新カリキュラムについて

(2) DP 技能④「人々の多様なニーズに柔軟に対応できる専門技術」について意見聴取

①現状紹介…(中国鍼灸・日本鍼灸、4 大ゼミ、多様な技など)、今後のねらい(統合医療の中の鍼灸など)

②現在～将来的に鍼灸師への社会的なニーズが今後どのように変化していくか、もしくははしないのか

(1) カリキュラム改訂について

(委員からの質問)

カリキュラム改定は定期的に決められていることなのか？学校が独自に 2022 年度に改定することをあらかじめ決定して取り組んできたことなのか。

(学校からの回答)

4 年前に国が定めるガイドラインの改正があり、大きなカリキュラム改定を行った。その後ガイドラインの改正は行われていないが、本校では新たなカリキュラム開始から一回りした 3 年後の昨年度よりカリキュラムの見直しを開始し、今回のカリキュラム改定に至った。

(委員からの質問)

夜間部が週 5 日制になることにより時間数が減少する一方で、授業時間数の見直しにより中国鍼灸実技を増やしているがバランスをどのように調整したのか、削減対象となったものはどのような部分かを教えてほしい。

(学校からの回答)

時間数を削減した科目は規定よりも多く行っていた科目であり全体的には問題がない。年度末に 1 か月程あった「春休み」を少し短縮して調整することで週 5 日制を

実現した。学生からすると社会人の方も多く、「春休み」という感覚が強い学生は少ないと想定している。

(委員からの質問)

4 期制から 2 期制にしてアウトプットする機会が少なくなり、学習力の担保が難しくなると思われるがどのように考えているか？

(学校からの回答)

4 期制の目的はアウトプットする機会を多くする / 試験範囲を狭めることにより学習する回数を増やすということにより学習定着させることであつたが、単位にかかわる試験が年 4 回実施されていたことは学生にとって負担やプレッシャーが大きかったということもわかった。現在は、LMS（本校が独自に開発した学習管理システム：Learning Management System）での学習や小テストなどを実施し、日常からアウトプットする機会を多くするようにした。単位を取得するために試験を増やすのではなく、授業内でも授業外であっても日常からアウトプットを増やすことを意識することのほうが効果的であると考え、2 期制にすることにした。

(委員からの質問・意見)

新カリキュラムの科目関連図は学生自身が今、カリキュラムのどの部分を学んでいるのかが分かって大変すばらしい。付け加えるとするならば日本医専が思う「理想の鍼灸師の具体的な人間像」というものをカリキュラムに落とし込むことができれば、更に活きたカリキュラムとなると感じる。また、他大学ではカリキュラム関連図をナインバリング形式にしているところも多い。検討していないのか？

(学校からの回答)

私淑であろうと、そばにしようと自分の憧れの存在（理想像）があると励みにも戒めにもなる。「本校における理想の鍼灸師」とはどのようなものか、またどのように表現してカリキュラムと学校の雰囲気と結び付けていくのかという大きな課題とヒン

トをいただいた。ナンバリング形式も検討したが、学生がビジュアル的に見やすいものにした。今後も、より見やすい形式を検討していきたい。

(委員からの質問)

以前も伝えたと思うが、自学自習を定着させるためには図書館の充実が重要だと思っている。その後、図書館について変化した部分はあるか？

(学校からの回答)

コロナの影響で利用者数は減少してしまっただが、以前は科目によっては授業内に図書館に行き学生と一緒に調べ学習することもあった。また、図書費予算も増額し蔵書の充実化に力をいれてきた。校舎の改修により図書室が本校舎ではなくなったことから、学生が利用しやすい工夫がより必要になったため、引き続き検討していきたい。

(委員からの質問)

カリキュラムは学生と教員との2軸で考えないといけないと思っている。カリキュラム編成の内容や DP に対して教員全体に習熟度は上がっているのか。

(学校からの回答)

本校の3つのポリシー（AP・CP・DP）について整理して文言化したところは教職員のなかで認識ができつつあるが、各授業や授業外活動に落とし込むところまでは至っていないため、発展途上といった状態である。

DP における「知識・技能」は授業に落とし込むことができるが、「態度や人間性の形成」を授業の中にどのように落とし込むかをプランニング中である。一方で授業力の育成についても強化していきたい。シラバスにおける科目の到達目標を教務・カリキュラム編成委員メンバーで作り込んで教員と会話をしながら授業設計をしていきたい。また、試験においても到達目標に到達できているかどうかを確認できる試験となっているかというところまで作り上げていきたい。

(委員からの質問)

3つのポリシーについては学生に公開しているのか。(以前、委員が ZOOM で講演をしたときに) 実際に多くの学生がうなずきながらメモを取り聞いていたが、中にはうつ伏せでの受講者や画面に映らない学生もいた。基本的な授業態度等が「一事が万事」につながると思う。

(学校からの回答)

3つのポリシーは現在ホームページ上で開示をしているだけであり、しっかりとした説明しているわけではない。今後学生にむけて周知する働きかけが必要だと思っている。授業態度についても1年次の序盤に体感していただくことが大切だと思っている。授業内で個別に声をかけたり、アウトプットする時間をとったりと、2WAY のコミュニケーションをとっていくことが大事だということ認識している。来年度のカリキュラムを通じて戦略的に実行したいと考えている。

(委員からの意見)

東京都鍼灸師会では東京マラソンでのボランティアなど、表に出かけていき区民の方々を対象に様々な活動を行っている。そういった活動についても3年間の中で身に着けてつけていただきたいと思う。ぜひ協力していきたいと思っている。

(学校からの回答)

ぜひお世話になりたいと思う。よろしくお願いします。

(2) DP 技能④「人々の多様なニーズに柔軟に対応できる専門技術」について意見聴取

(委員からの意見)

鍼灸や東洋医学について、伸びしろがあると常々思っている。ニーズはあると思っているので私たちがどのように伝えていくか、どういったことで役立つのかといったことを伝えると同時に、需要の掘り起しが重要であると考えている。例えば、在宅医療をしてい

る先生から、「鍼と在宅医療の相性がよい」という話を伺うが、それをどのように伝えていくのが課題である。エビデンスをもってまとめ、それを広めていくといったような仕組みがこれからは必要になってくると考えている。産業の分野でも「健康経営とはりきゅう」などの取り組みもあり、伝え方や広める職域などが課題である。

(学校からの質問)

以前に、「フレイル」が今後は大変重要になってくるといってお話をお聞きしたが、本校でも「高齢者に対する治療」という実技授業があり、疾患に対しての治療方法を教授している。「フレイル」を学校の授業で実践する方法があるか？

(委員からの回答)

東京都鍼灸師会では毎週「筋力アップ教室」実施しているが、コロナ禍により参加者が減少し「コロナフレイル」というものを実感している。参加者の方には具体的なツボを意識した運動の仕方などをお伝えしている。また、ボランティア活動参加の折には鍼灸の話題なども参加者のみなさんにお話している。鍼灸師という「職業活動」と、それを背景にしたボランティア活動などの「社会的参加」が鍼灸の啓発につながっていると思うので、その点についても在学中から身に付けていただきたい。コロナにより「免疫力、自然免疫」という言葉とともに「鍼灸」も注目されてきている。鍼灸師がこれをきっかけに「免疫力、養生力を高めること」を広めていくことによって、鍼灸はより定着していくと思う。

(委員からの意見)

現状、そして今後【背景】と【ニーズ】として考えられることは以下の通りである。

【背景】

- ・ コロナ
- ・ 在宅時間の長期化、リモートワークの普及
- ・ SNS の日常化

- ・鍼灸師が鍼灸整骨院に勤務して、鍼をする機会が増加傾向
- ・コミュニティ、勉強会（学びの DX）の隆盛
- ・レンタルサロンの台頭

【キーワード（ニーズ）】

- ・自立神経の調整（一般化してきている）
- ・美容
- ・手技（手で触れることが患者にとって伝わりやすい。無資格マーケットの拡大している中、鍼灸師として手技ができるのは非常に大きい）
- ・未病（予防という意味合いもある。経済産業省を含め、国がこれからの課題としている。今後、世の中の認知が高まっていく）
- ・経営（鍼灸師として働きやすい環境を考えると、数値、マーケティング戦略を考えることが多くなってくる）

【課題】

- ・「鍼灸」の価値伝達＝国家試験

(学校からの回答)

「手技」については本校の柔道整復学科でも話題になっている。あからさまにマッサージの授業はできないため、カリキュラム外の時間を使うなど様々な方法の検討が必要。手技ができた方がやれることも広がる部分もあると感じる。このようなことも踏まえ、新カリキュラムの運用を検討していきたい。

以上

令和 3 年度 第 2 回教育課程編成委員会（鍼灸学科）議事録

【日時】令和 4 年 2 月 24 日（木） 14:00～15:00

【場所】日本医学柔整鍼灸専門学校 ZOOM 開催

【出席】委員 小林 潤一郎（東京都鍼灸師会 副会長）

鈴木 幸次郎（天心堂鍼灸院 院長）

武内 潔（東京都鍼灸師会 副会長）

寺裏 誠司（株式会社学び 代表取締役）

藤原 良次（株式会社アールエフ 代表取締役）

前田 真也（カリスタ株式会社 代表取締役）

松田 博公（日本伝統鍼灸学会）

学校 岸本 光正（副校長）

青木 春美（鍼灸学科長）

天野 陽介（カリキュラム編成委員会委員長・鍼灸学科教員）

中村 幹佑（教務委員会委員長・鍼灸学科員）

西野 祐介（鍼灸学科員）

事務局 吉田 智哉（事務部長代行）

小浜 悠樹 兼子 啓太郎 伊藤 真紀

川上 英史 圓乗 佑太 緒方 洋太郎（議事録）

以上 19 名

【欠席】委員奥田 久幸（校長）

【議題】

(1) 振り返り

(2) 学び直し層（40 代以上）の学生に身に付けておいてほしいこと

(2) 振り返り

2021年2月15日にいただいた下記のご意見に対して、以下報告された。

- ・卒業時に身につけておきたい技能について

報告) 科目・学年ごとに実技授業の到達目標を検討し始めた

(2) 学び直し層（40 代以上）の学生に身に付けておいてほしいこと

学校より、以下の点が報告された。

- ・40代以上の入学者が増えている。
- ・全国に比べると、本校は40代以上の割合が高い。
- ・本校の40代以上の7割がキャリアチェンジ層。
- ・上記状況を踏まえて、40代以上の希望する就職現場の声を聞いてカリキュラムに落とし込みたい。

上記報告に対して、委員の先生方より、以下の点についてご意見をいただき、それぞれ学校から下記のように回答をした。

- ・2割が就職、他が開業ということだが、40代以上の方が、ということでもいいか？

入学時の希望を詳細に記録しておくとのよいのでは。

回答) 年代別ではなく、全体として。入学時の希望は現在担任事の個別把握になって

いるので、今後学校としてまとめていきたい。

- ・学生の希望の年収はアンケートとっているか。40代以上は特にお金を稼がないといけないと思っている。

回答) アンケートとして年収は確認していないが、「理想的な鍼灸院」という授業があり、その中で希望の収益を聴く。現実と違って希望が高いイメージである。

- ・キャリアをチェンジして学校に入ってくる人は、何を目的にしているか。収入？生きがい？人間関係づくり？もし収入を目的にするのであれば、経営やお金儲けのための人格形成など、学ぶべきことはかなり異なってくる。

回答) 入学時は、人とつながりたい、役に立ちたい、という希望を持つ人が多い。長く勤めたいという人や、組織に縛られたくない、鍼灸に新しいものを取り入れたい、という人も一定数いる。学生の希望をもとに、カリキュラムに組み込んでいきたい。

- ・本日のテーマの設定目的は？

回答) 40代以上の就職が希望通りでないことと、40代以上が一定数を占めていることにより、「学びなおし」が今後重要課題になっていると感じているため。

- ・40代以上の就職希望のデータの蓄積はあるか、そのデータをもとにカリキュラムに落とし込んでいるか。

回答) 就職希望のデータはあるが、落とし込みまではできていない。

- ・40代の方は体力面に課題がある方や、自分を捨てることが難しい方もいる。ご本人に認識があるか。

回答) 認識があるかどうかは明確には不明だが、教えづらさは感じている。態度教育が大きな課題だと認識している。

その他委員の先生方より、以下の点についてご意見をいただいた。

- ・『鍼灸師になるという「一筋」なこと』と、『実際に求められる、あらゆる環境に対応するという「柔軟性」』は、一見矛盾するようで誤解されがちである。自己変容力を持たせないといけない。それを育てる学校であるべき。
- ・目的意識をより強固にしていく3年間。何のために学校に入ったのか、再確認の場もある。
- ・実際の現場より、ご年配の先生は、体力的なこと、若いスタッフとうまくやっていくこと、が問題になる。授業で若い人たちと同じような期待値であることが足かせになっている可能性もある。こちらの棲み分けが今後必要になってくるかもしれない。
- ・謙虚な気持ちは持ってほしいと感じる。教育に反映する際に、論語や孟子を読んで気づきを与えることも一案。
- ・大企業が40代以上を多くリストラしている。転職先で自分を捨てられず転轍が生じている例が多発している。事前にインターンシップで実際に転轍を起こして本人が気づく場が理想的。柔軟な姿勢を身につけられるような教育やカリキュラムが必要。
- ・知識や技術だけでなく、必要最低限の保険の知識を持つておくことが大切。
- ・素直に学ぶ姿勢がなければならぬと強く思う。ハウレンソウ、コミュニケーション

能力の有無によって伸びるか伸びないが決まる。

- ・ 付属接骨院の利用。自分次第だという意識がとても重要。

回答) 付属の鍼灸院を開設している。そこで臨床実習だけでなく、経営等も学べる機会にする予定でいる。

以上